

令和元年度 第1回奈良ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 中澤 静男

- ◇開催日時 平成31年4月25日(木) 19時～21時30分
- ◇会場 次世代教員養成センター多目的ホール
- ◇参加者 蔵前(真美ヶ丘第一小)、河野(附属小)、中澤哲・小谷(平郡北小)、吉田・長友・市橋・中村(附属中)、島・近藤(郡山西小)、西口(東登美ヶ丘小)、石田(左京小)、大西・圓山・阿彌(飛鳥小)、吉田(済美小)、村岡(西大和学園高)、高良(筒井小)、樋口(平城西小)、三木(都跡小)、藤田(滋賀県社会福祉会)、檜原(日本ESD学会)、中澤敦(近畿ESD活動支援センター)、森口・北村・中澤(奈良教育大学) 仲村、櫛、岩城、坂元、谷垣、中西、畑下、東尾、奥平(奈良教育大学学生)

計 35 人

◇内容 スペシャリストの考察に学ぶ

(1) 日本の食料生産 河野晋也

- ・クリティカルシンキングに特化して取り組み
自分の目に見えるもの(社会)を批判的にとらえることはよく取り組まれている。しかし、自分自身の行いや価値観について批判的にとらえることも重要なのではないか。

「地産地消は大事だ」で終わるのではなく、「自分は地産地消をやっていけるのか」に踏み込む。

- ・結論は明確でないが、自分の行動を見つめ直す態度を育てる。
- ・学習の終わりは難しさに気づくことと位置付けていた。一応(図5)参照。
- ・漁業におけるマグロの枯渇。でも食べないといことはできないだろう。江戸時代にはマグロは人気なかった。このあと日本人の嗜好はサーモンになっていっくだろう。マグロがおいしいというのは、思い込みかもしれない。
- ・クリティカルシンキングしたものをさらにクリティカルにとらえるところが素晴らしいと思った。
- ・発問の設定が優れていると思った。
- ・すぐに答えが出ない、もやもや感で終わるのもありかと思った。実生活に学んだことが出てきた場合、授業の意義がある。授業の中で必ずしも答えが出なくてもよいと思った。授業での完結を求めない。
- ・低学年のクリティカルシンキングとは。

(2) 信貴山縁起絵巻をよむ 中澤哲也

- ・本物を見るのは大事。
- ・ゲストティーチャーなど、多様な人に出会ったこと、専門家に学んだことが発表意欲につながったのでは。
- ・ゲストの活用の仕方のコツ。
子どもは質問しづらい。ガイドが7人来ってくれたので、少人数になり質問しやすかった。ガイドも事前に研修されていた。事前打ち合わせで授業の習いなどを丁寧に伝えておくことが重要ではないか。



- ・人材の見つけた方

今回は、近畿地方活動支援センターが人材を見つけてくれた。役場に出向いて見つけたりした。

- ・発表を聞いた地域の方の感想にはどういうものがあったか。アンケートや感想などを書いてもらえるようにすれば、当日参加できなかった児童にも伝わるし、考察するときの客観的なデータとなる。
- ・役場の方にとっても初めてのことだった。E S Dの視点に気づかれたことも多かったのではないか。
- ・小中で系統的に取り組んでもいい教材なのではないか。
- ・地域教材を扱うと、子どもの食いつきがよい。子どもにとって記憶にも残る

(3) わたしたちの生活をよりよくする政治（地方自治） 島俊彦

- ・川上村の人口減少に対する政策を知り、地元である郡山市の政策への関心を高めた。
- ・クリティカルシンキングの育成が中心になると想定していたが、システムズシンキングの育成により効果があった。
- ・児童の発言で方向性がかわるように思うが、どれぐらい想定していたのか。子どもも教員もともに学ぶ姿勢で取り組んだ。



- ・目の前の子どもの反応を予想するが、子どもはそれ以上の反応をする。ある程度の大きなゴールは持っておく。子どもの姿を想定しておくのは大切。ゴールに導こうというのは違う。
- ・中学校の実践につなぐことができる。
- ・6年生の政治の単元は自分事にしにくいのが、本実践ではそれができていた。その秘訣は何か。地方政治の影響は感じにくい。そこでまず川上村を事例として取り上げた。しかし、身近に感じることもできたかどうか。市の担当者からの「意見を聞きたい」という投げかけが、子どもの意欲を引き出した。

- ・電話インタビューの練習、取材の練習は必要。

(4) 昔の暮らし 蔵前拓也

- ・昔の暮らしの道具はいろいろなことができる、多様な役割を果たしていたと、見直すことができた。
- ・昔の暮らしは不便というステレオタイプな見方を変えることができた。
- ・行動化には至らなかったのが反省ポイントである。この単元での行動化とは何だろうか。
- ・発達段階に応じたクリティカルシンキングがあるだろう。
- ・家電製品が普及することを多面的にとらえる必要があるだろう。
- ・昔とはいつなのか、授業者として捉えておく。
- ・子どものアポ取り、質問をどのように支援したのか。



見学の受け入れ先からも、子どもからのアポ取りは好評だった。教師が作らない方がいい。

質問に反映された学習テーマについては、教員から提示した。3年生だから無理だろうという先入観は不要であった。

- ・今回は考察の仕方をスペシャリストの方々から学びました。
E S Dで育てたい価値観、見方・考え方、資質・能力、SDG sとの関連を意識した指導計画を立てるとともに、そのポイントについて考察を加える。
客観的な考察を行うために、学習前の子どもへのアンケート、学習後のアンケート、その他、客観的資料を蓄積しておくことが重要。
- ・次回は5月16日（木）です。現職教員と学生のマッチングを行います。よろしくお願いします。

